

「春日の神」を祭った万葉の人々

2021.8. 太田蓉子

「春日かすがの地」は、奈良市の東部一帯(現在の奈良公園)の地を称します。そして、「春日の神」は、一般的に、“奈良時代より春日大社に祀られている神、藤原氏の氏神”と見られています。春日大社には“春日明神や春日権現の信仰(神仏習合)”もあり、ここは、全国におよそ1000社ある春日神社の総本社です。

大社は、御蓋山みかさやま(若草山ではない)の裾に多くの社殿を備え、前面とその南は広々とした春日野(飛火野など)に、背後は、奥深く鹿が棲む春日山原始林に守られています。この景観は、今も奈良時代と大きくは変わらないと思われま

す。しかし、奈良時代にこの地を詠んだ万葉の歌を見ると、人々がここに祭った「神」については、かなり異なる容相が見られます。

「万葉集」を主な資料として、人々が「春日の風景と神」についてどのような心情や認識を持って生活していたのかを探り、「春日・御蓋山の神の姿」について考えます。

(尚、「万葉集」は、古歌に年代不明のものもあるが、およそ629年・34代舒明天皇から46代孝謙天皇時代・759年迄に詠まれた歌を収集している。ここに歌を詠んだ人々および歌を享受した人々、更には、歌の場を支えた人々を、“万葉の人々”と称し、その人々が生きた時代を“万葉の時代”と称します。)

古代「春日」と呼ばれた地域は、奈良盆地の北部・東よりの一帯です。平城遷都以前は、平城京の外京に当たる地域をも含み、東部の山々と裾野一帯を広く称していたと思われま

す。5・6世紀の有力豪族・和珥(和邇)に氏の勢力地でした。和珥氏は春日氏など幾つもの氏族に分岐し、蘇我氏の隆盛にともない弱体化しますが、和珥・春日氏系の集団が築いた古墳は、この地に数多く存在していたと言われま

す。(9代開化天皇陵・春日率川坂上陵古墳・奈良市三条通り油坂は、残された古墳の一つと見られている。殆どの古墳は平城京造営のために壊された。)

平城京の人々が詠んだ万葉の歌には、当然のこととも言えますが、この地を詠んだものが極めて多く、「春日山・春日之山」は18首、「御蓋山みかさやま(御笠山・三笠山)」も18首、そして「春日野・春日之野辺」は23首あります。重複して詠み込んでいる例もあるが、他にも、この地と推測される歌があり、合わせておよそ60首にものぼります。

平城遷都(710年)後の「春日の地」については、

まず、元明天皇記(「続日本紀」より)に、変事の急報のために“(生駒山)高見烽とぶひ(のろし台)と、大倭国春日烽を設けた(712年)”とあります。これは、“春日野の飛び火”であり、春日山の裾・南および西の一帯を、「飛火野」として整備したことを表しています。(山裾南にあった古墳を壊した痕跡がある。)

春日山(春日の地の山々の総称)の裾が、広々とした草原・春日野になっていきます。

御蓋山みかさやまは、春日山の一番手前にある小さな山(293m)で、衣笠(きぬがさ 衣蓋)(貴人にさしかける傘)のような上部がなだらかな円錐状に尖がった山であることから

名付けられた、姿のよい山です。古くから“神山”であったと思われませんが、「飛火野」の出現によって、くっきりとその姿を現します。平城京の東の高台に座して、“藤原京における香具山”のような感覚で眺められるようになったと思われま

(尚、若草山(三笠山とも、頂上に古墳がある)(342m)については、その西麓の丘に大仏(廬舎那仏)の鑄造が始まり(開眼供養は752年)、東大寺の伽藍が整うのは万葉時代の終わる頃であり、それ以前の若草山は、万葉の人々には、“飛火野の北東奥深くにある春日の山々の一つ”との認識であったと思われま

また、元明天皇記には、(717年)“遣唐使が蓋山みかさやまの南で神祇じんぎを祭った”ことが見られます。「御蓋山」が、“聖なる山”と見られていることが分かります。

万葉の歌について見ると、

山部赤人(宮廷歌人)は、「春日野に登りて作る歌(長歌と反歌)」において、“高座たかくらの御蓋山”と詠んでいます。

「春日はるひを 春日かすがの山の 高座たかくらの 御笠みかさの山に

朝さらず 雲居たなびき、、、」 (巻3・雑歌—372番)

“(春はるの日は霞かすむ)春日かすが、その山の、高座(玉座)にさしかけた御笠と見える御蓋の山に、朝ごとに雲がたなびき、、、”

(「春日カスガ」の地名は、「霞カスミ」に由来すると言われる。)

「高座たかくらの 御笠の山に 鳴く鳥の

止やめば継ががるる 恋もするかも」 (—373番)

“(高座の)御蓋山に鳴く鳥が、鳴き止んだかと思えば直ぐにまた鳴き出すように、抑えた想いが直ぐにまた沸き起こる、そんな恋をしています。”

また、

佐伯赤麻呂(不詳、佐伯氏の誰か・ペンネームか)が、披露して人々を笑わせたと見られる歌、『娘子をとめとの贈答歌』とする歌に、“春日野の神の社”が詠まれています。

娘子が応えた歌「ちはやぶる 神の社やしろし なかりせば

春日の野辺に 粟あわ蒔まかましを」(巻3・譬喩歌—404番)

“ちはやぶる神の社さえなかったら、春日の野辺に粟を蒔きましょうに。

(その粟畑でお逢いしたいものですがね。)”

赤麻呂がさらに贈る歌「春日野に 粟蒔けりせば 鹿し待ちに

継ぎて行いかましを 社し恨うらめし」 (—405番)

“春日野に粟を蒔いたなら、それを食べにくる鹿を狙い待ちに、毎日行きたいのだが、神の社があることが恨めしい。”

(この後、娘子は“その神は、私が祭る神ではありません。貴男は、ご自分の春日の神をよくお祭りあそばせ。”との旨、歌います(406番)。

「神の社」を、“赤麻呂の妻”の譬えにして詠んだ3首です。「娘子」は、遊行女婦うかれめであろうと想像させています。)

(ここでの「社」は、“神が降りてくる所”の意味と見る。後述するが、この地に「神社」は、まだ建っていない。「鹿」は、春日山に棲息していたと見られる。)

赤人も赤麻呂も(ともに聖武天皇時代の官人)、御蓋山と春日野を“神聖な所”と意識しています。しかし、それを、真面目な国土讃歌や贈答歌として詠うのではなく、爽やかに恋歌の背景にしたり、気軽に戯れ歌に引き入れて、詠っています。

数多く詠まれているこの地の歌は、“朝は日が昇り、夜は月が照らす”、“春は霞が立ち、秋には黄葉する”、“手入れをした浅茅あさじ(低い茅かや)の原”があり、“春は梅や桜、秋は萩の花が咲き、尾花が露に光る”、そんな「春日の風景」を、語っています。

そして、そこに人々が、余暇に、時には行事として、野遊びに出かける。『野遊』と題する歌4首(出典未詳)からは、そんな光景が想像されます。

「春日野の 浅茅が上に 思ふどち

遊ぶ今日の日 忘らへめやも」 (巻10・春雑歌—1880番)

“春日野の浅茅の上で、親しいもの同士が思いのままに遊ぶ今日の日は、忘れられない楽しい日だ。”

「ももしきの 大宮人おおみやびとは 暇いとまあれや

梅をかざして ここに集つどへる」 (—1883番)

“(ももしきの)大宮に仕える人たちは、暇があるからであろう、梅を髪にさしてここ春日野に集まって興じている。”

(「野遊び」には、「ボール遊び」等があるが、薬草摘み、鳥射ち等の実用を兼ねることも。)

多くの「歌」から、人々がこの地に対して、“神聖視”するとともに“親近感、親愛感”を抱いていることが見られます。

その後、この地の「神」については、

藤原太后おほきさき(光明皇太后)が、遣唐大使・藤原清河に賜った歌と、清河が応えた歌に、その状景が見られます。(孝謙天皇・752年の遣唐使派遣の時)

『春日に神を祭る日に作らす歌』

「大船おほふねに 真梶まかじし貫ぬき この我子あこを

唐国からくにへ遣やる 斎へいはへ 神たち」 (巻19—4240番)

“大船に立派な櫂かいを左右一杯に取り付けて、我が子を唐へ遣つかわします。神々よお守りください。”

『清河の歌』

「春日野に 斎くいつく三諸みもろの 梅の花

栄えてあり待て 帰り来るまで」 (—4241番)

“春日野の三諸みもろ(神が降りる壇)に植えた斎い梅の花よ、咲き栄えて待っていておくれよ、私が帰って来るまで。”

これらの歌に詠まれる「斎」と「神」について見ると、

藤原清河の歌からは、御蓋山の麓に小高い神座を作り、そこに神のための斎梅を植え、神祭りを催していたことが分かります。

「斎」は、「斎く・いつく」「斎う・いはふ」ことであり、“心身を清めること、そして神を祭り神に祈る”ことを意味します。

光明皇太后は、「神たち」に向かって「斎へ」と詠みます。“身を引き締めてその力を発揮しておくれ”と、親しい人たちに命じ依頼する感覚で、神々に呼び掛けています。

先述したように、元明天皇の時、遣唐使が祭ったのも「神祇じんぎ」です。「天神地祇」を祭ったのであり“天つ神と国つ神”の大勢の神々に祈っています。

以上に見てきたことから、万葉の時代に平城京の人々が祭った「春日の神」とは、“ここで神祭りをし祈れば、直ぐに降り来て、どんな願いにもそれぞれの神が応じて下さると信じる”そんな“親しく頼もしい神々”であった、と見ることができます。

それ故、人々は安心して好んでこの地に遊んだ、また、適宜に草木を刈り取るなどの手入れをし、明媚な春日野を保持したと思います。

また、このような、謂わば“人々と神々の別天地”が成立し得たのは、平城遷都の初期、ここには、有力氏族が自分たちの始祖として祭る特定の神もそのための社も無かった、「春日の地」は、謂わば、“人々にとっても、神々にとっても新天地”であった故、とも言えると思います。

後記

「東大寺山堺四至図」(正倉院所蔵)(孝謙天皇時代・756年作成)を見ると、「春日の地」が、東大寺の寺域となったかに見えます。しかし、東大寺は、この時まで、北西部に大仏殿と二つの伽藍が建つのみです。その南東に、川を挟んで「御蓋山」があり、その麓に「神地」と書かれた箇所があります。建物は無く、樹木が数本描かれています。神祭りの場が、ここに設定されるようになったと見られます。(頁5、「図」参照)

その後、称徳天皇(孝謙天皇重祚、皇太子がいない、政情が不安定)晩年に、左大臣に昇っていた藤原永手(藤原房前ふささきの次男・藤原北家)によって、「春日の神」が大きく変化します。

春日大社の由緒書きは、“称徳天皇の勅命により、藤原永手らによって社殿が造営され(768年)、ここに、神の来臨を請こうた(勸請かんじょう)”旨記しています。

その神は、武甕槌命(たけみかずちのみこと(国譲り神話の軍神))で、常陸国・鹿島から鹿に乗って来られたと言います。(以後、鹿を、神の使いとする。)鹿島郡は、天智天皇の時代から、東国経営のために中臣氏(藤原氏のもとの氏)を遣わして、その地の祭祀を掌握させていた所です。そして、河内国・枚岡(ひらおか)の神社から迎えた神・天児屋根命(あめのこやねのみこと(天孫降臨の時の五神の一つ))は、中臣氏が始祖とする神です。これらの神に同行した神を合わせて4神が招かれて「春日の神社」が完成します。神社は国家的祭祀を担う大社となり、と同時に、藤原氏の氏神神社となって、平安時代に繋がります。

主な参考文献 伊藤博「萬葉集・釋注」集英社

- ・井手至・毛利正守「新校注・萬葉集」和泉書院
- ・坂本信幸、村田右富実「万葉の旅・大和編」小学館
- ・坂本、毛利「万葉事始、年表」和泉書院 ・吉川弘文館「日本史年表」
- ・水谷千秋「古代豪族と大王の謎」宝島社新書
- ・春日大社 HP ・東大寺、春日大社など奈良市観光 HP 等
- ・奈良地域関連資料画像データベース「東大寺山堺四至図」模写本

(奈良女子大学蔵)

春日山・御蓋山 と 飛火野(春日野)



春日大社 HP・『写画廊』からの写真

「東大寺山堺四至図」 A 大仏殿 B 若草山 C 神地 D 御蓋山 E 春日野



主に南部と東部の一部を省いて写した